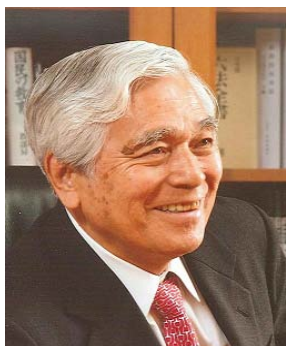


埼玉私学研究大会の成功に期待する

埼玉県私立中学高等学校協会 会長 小川 義男



我が国世相の頹廢は、アメリカがもたらした戦後教育に伴う思想的、理念的頹廢に起因しているのではないかと思われる。昨今文科省は35人学級を実現するという気配を見せている。是非は兎も角、我が国にそんな財政的ゆとりがあるのかということすら心配になる。クラスの人数を減らし、複数担任を置けば解決できるなどという次元を乗り越した荒廢、低落状況に我が国教育は置かれている。

デューイは「子どもは教育の主体であって客体ではない」と語った。本来的には正しい理念であろうが、それが発達段階を無視して強調されがちであったところに、教育荒廢の遠因があったと私は思う。母の乳房にすがって乳を食う赤子は、いかにして自己教育の主体たり得るのか。

子どもの可能性に対する過剰な期待、ないものねだりは、規範の自然発生をすべて子ども任せにする傾向を生んだ。かくして母性すら、その根底を揺るがされるに至った。ついには、我が子を洗濯機に入れて虐待した末、殺害するような「母親」を生んだのである。

この度の研究大会は、現場実践に伴う具体的問題を取り上げるのであるが、その傍ら、我が国教育六十年の大きな流れについても振り返って頂けたらと、「戦後教育のシーラカンス」は願うのである。

教育力の向上をめざして

埼玉私学教育研究所 所長 小林 節



毎年開催している教育研究大会は、埼玉私学の教育力を維持向上させるための意義深いものです。

教育研究所の役割は、各学校が、日頃、実践している教育活動を提供し合い、情報交換と共に、よりよい内容を求めて互いに切磋琢磨する機会を提供していくことにあります。各分科会ではテーマにそった、講演や実践を通して研究を深め、生徒の能力の開発に役立てて欲しいと思います。

教職は、自ら学ぶことで生徒の意欲を引き出せるやりがいのある仕事です。幅広く深いものが求められ、心身ともに鍛えていくことが重要になります。生徒に必要とされ、保護者や地域社会から信頼されるためには、専門職としての能力を高め、指導者としての豊かな人間性を培うことが大切です。

社会は、学校や教員に対する強い要望と大きな期待を持っています。まして、私学に対する思いは一段と強いものがあります。それぞれの学校が掲げる建学の精神と伝統の強みが、活かされるためにも、学校間の連携や協力態勢も視野に入れて、さらなる埼玉私学の発展をめざしたいものです。